

西阿公の勤王戦跡に就て

第一従來の研究の疑點

一、延元々年十二月六日城をなすとあるも、堀、堀壕等の設備は決して短日月に成し得ず。

二、大和に於ける吉野朝廷の勢力は興國二年迄は攻勢的である。此の原因は延元々年間、足利尊氏直義は其の有する軍の主力を新田義貞に向け従つて主戦場は金ヶ崎、杣山城の如き越前方面にして一部を以て他に對せし時なり。

三、延元三年二月北畠顯家は義良親王を奉じて奥州軍を率ひ西上し足利軍の西進せし後方を追尾しつゝ西進し美濃、青野原合戦に戦鬪利ありして軍を轉じて伊勢に據り、雲出川畔に戦鬪不利なる時大和方面は西阿公、真木定觀等河内の楠、和田等と共に相當の勢力を挽回しありて顯家郷は大和宇陀を経て大和平野に入り奈良附近に戦鬪を交へし時

東大寺、興福寺等の關係ありんも西阿公の有力なる連絡ありし事を知るべし。
四、西阿公の身命を賭しての戦跡は細川顯氏、直義の命により有力なる一從
隊を率ひ攻撃し來たりし興國二年二月末より七月三日に至る戒重城を中心
とせる西阿公獨力を以てせる陣地戦である。
約四月間此時代稀に見る平地城の攻防を實施し勦強の抵抗をなせしはむしろ
奇蹟と云ふべし。

五、從來西阿公城として戒重、川合、安房の平城と外山、赤尾、外鎌の三山地城を
數へ前者を外城とし後者を根城として研究せられあるも寧ろ戦斗、攻防
の重點より判断して戒重を中心とせる平地城、此石群が西阿公の身命
を賭したる城廓設備にして従つて諸文献に見るも後者の三山地域は設備
に關し何等據るに乏し。

即ち西阿公は此の山城は重要視せざりしものにあらざるや否むし元弘三年
中院定平（北畠一族）の實施せる遺髪を継ぎたるものにして従ひて研究は戒
重を中心とする城砦の所元に重點を注ぐを當然とせざるや？

第二戰跡研究の價值判定

一、大楠公の下赤城さへ僅かに旬日を出でずして落城せり。然るに西阿公の實施せる戒重附近城砦は要害堅固ならず然るに約四ヶ月餘り敢強なる抵抗を續け得し原因の探究は後丰城廓が殆んど平地城なりし事と考察する時妙味ある研究ならずや!!

二、此時代の攻防戰は全國各地殆んど山地城なり然るに平城にして尚且此の抵抗をなし得たるはむしろ奇蹟に近し。

三、攻者の攻撃は其の將細川顯氏の慎重なると云はんよりむしろ今日の戰術上の言葉を以てせば正攻法により遂次攻撃を復行し遂に攻畧するを得たり。要は日本戰史上特に異色ありて研究の價值を認む

第三西阿公の勢力

延元々事十二月突如として飛出した西阿公とは抑、如何なる人か!! 何人も史學に志す人は此の疑問が起る。

久米博士は南北朝時代史に興福寺の給人六万衆後のぬなりと五六二頁に西阿公を説明した。

水木奈良女師高等師範學校教授は宗像神社の神官とされた。

而して南北朝時代を今茲に顧る必要がある。此の時代は我日本の神官の勢力は殆んど云ふに足りない。

僅かに伊勢大神宮、熱田、阿蘇の大宮司等が其の勢力を持った丈で現時官幣大社等の歴々たる神社も實に僧侶が之を支配して居たではないか。現に長谷寺の眞木定觀は西阿と共に勤王に參與した人で賊軍は此の忠臣を右文書に兇徒して記して西阿公の一勢力を物語る資料も水木教授は發表して居る。

何の時でも人を使ふのに經濟を離れて人を集め兵を集めて殊に戦闘等が出来るものではない。然らば如何に此の時代と云へ大和乎野に一勢力を持った西阿公は何か此の經濟の振りがあつたところがあるだらう。!!
斯く考へると單に宗像神社の一神官では餘りに經濟資源の貧弱なることゝ次第である。

古今最要抄にも西阿法師として興福寺春日神社の社寺領を押領したることを載せて居る。而も春日神社の神木が約九ヶ月も京都に遷座された事等を見逃しては西阿公の戦いを研究しても架空になる。

又一強力者が徒を集めて徴發的に資源を押へても一時的には續くかも知れないが數年も決して續くまい。

附近の住民は味方するどころか反抗的になるやうになるが普通通である。

殊に延元々年十一月末より興國二年の一月迄の四年一月の長時日の西阿公の戦いは決して此の櫻井附近でなく常に攻勢的に大和平野の中央以北に迫り及んで居る。此の一大勢力は何に發したらうか？

即ち公は興福寺の經濟に關係する職務にあつて三輪神社も多武峯も宗像神社も勿論其他南部大和の經濟資源を相當に支配し得たから附近の武士も郷土民も公の下に糾合して力を致し斯くも勲強なる抵抗をなし得太平記第十八に歴然として他の忠臣と共に名を連うねてゐるのではな

いか!!

西阿公の僧を藉であつたことは息良田も亦僧下而も楠正行と四條殿に二隊を率ゐる名譽の戦死をして居るのを見ても（天正本西院源本大平記）此迄の消息を物語って居るやうに思ふ。

第四城郭研究

此の研究は全く古文書に依る外資料がない。さうして今日迄中岡清一氏が研究されて居り現地に縁故乏しい私には確固としたることは云へないとしても古戦史研究を續けた私には西阿公の文献を見て從來の研究に段々と疑問が湧き熊谷留守司令官から命を受けた時から遂に今日に及んだ。西阿公が身命をかけて四ヶ月の間守備した戒重の城とは今の戒重を中心として五城砦が一集團的に相互援助をなしたやうに文献上から見思はれる。

賊將細川顯氏は従つて苦心して幾枚もの軍忠状を今日迄唯一の文献として傳へて居るやうに思ふ。

此の軍忠状なる田代文書は朋藤に開地井、片城、中八條の城砦を区別

して軍忠狀を將士に與へてゐるではないか!!

(田代文書甲)

田代豊前三郎顯綱甲軍忠事

一、大和國兎徒西阿爲御退治去丰十二月御發向時八幡南部御供仕去二月十九日於安部山取陣之處兎徒寄來之間馳向致令戰抽軍忠候之條無其隱候

(天野文書)

天野藝三郎遠政申和州軍忠事

右可討治西阿以下兎徒之由被仰下之間属當御手、今丰二月廿八日令發向國中以來構要害於攻口、數十度之合戰每度致忠節之條無其隱之上且大將被經御覽畢仍不能委細注進

(田代文書乙)

一、三月十四日於河内城南面攻口塗屏取陣、同廿日一夜合戰、捨身命致軍忠之處若黨三宅左衛門次郎入道攻寄城堀鎧之時自左小

時被射貫臂尻畢。此條都築次郎左衛門入道令息知畢。且所懸大將御目也。

(田代文書乙)

右彼兇徒等三月十五日自河合城合戰之時。四月十九日夜至城內於追落時於彼城南攻口。日夜結番致忠節之段。都築次郎左衛門入道爲和泉國守護御代官之間。同子息次郎依承彼陣々奉行。了賢忠節之段。令存知者也。次潤四月十九日河合城合戰城攻落後者。開地井城取東面於陣。至五月二十七日致日夜軍忠畢。(下略)

(田代文書甲)

一六月二十六日夜討之時。中八條之南堀限攻寄。致合戰之間。右腰受箭蒙疵候事。

(田代文書乙)

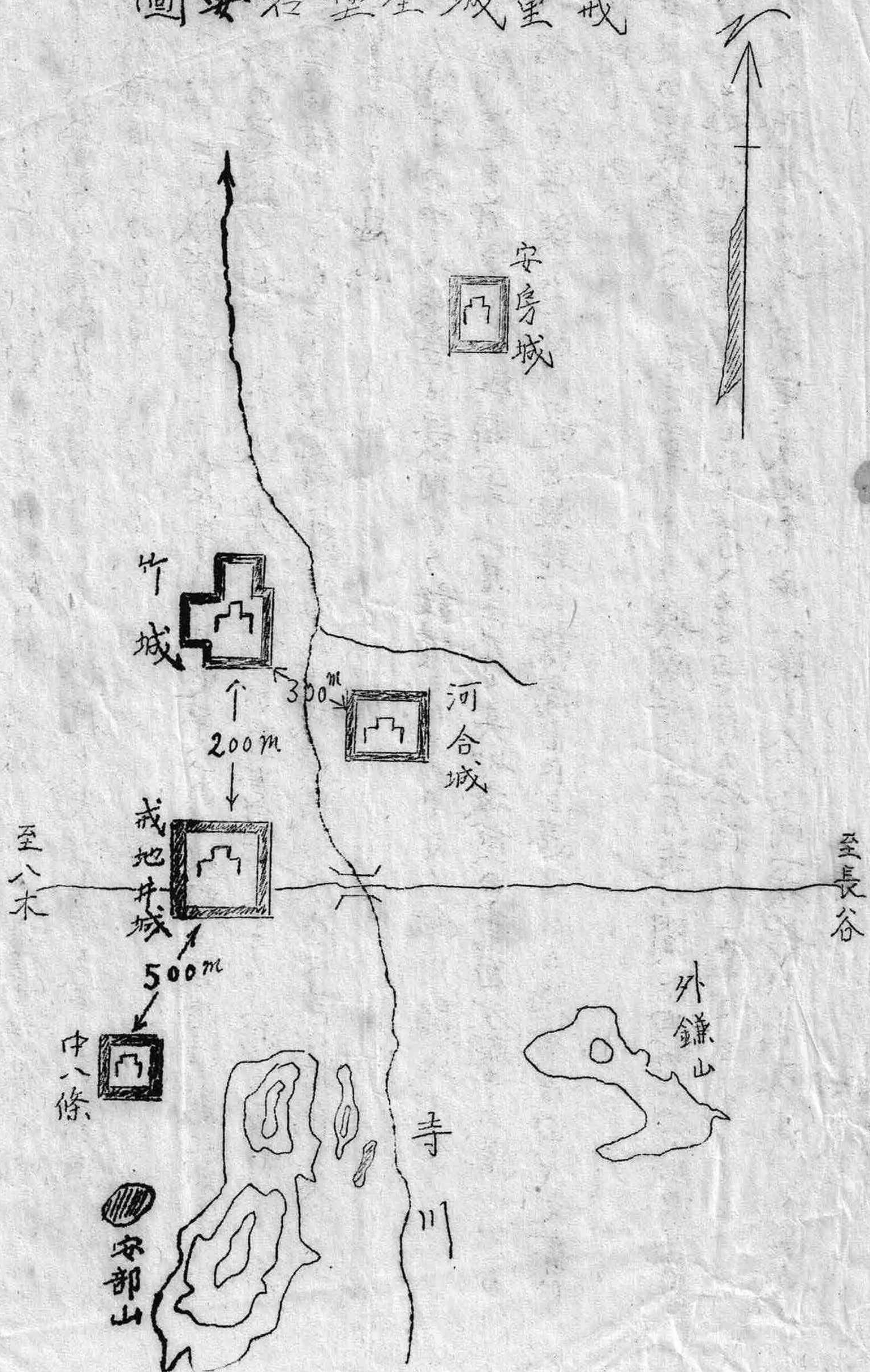
一六月二十六日夜討之時。息三位房、石前六郎以下若党等付竹城南面。屏裏致戰忠之段。都築次郎、石狩太郎、成田四郎次郎入道見及畢。

一同二十九日夜、同竹城之合戰之時、於彼城南面渡堀攻入城内、致合戰之刻、子
息三位房友太刀打之處、被切右足畢、此條都築次郎豐前彈正令見
知畢、又鹿草小田郎殿御存知所也

(天野文書)

一、六月二十九日開地井竹城夜責之時、責入千高矢倉之南脇屏内燒落矢
倉、遂合戰之時、若党堀籠六郎左衛門尉宗重、右脛橫河孝三郎經
長、左肩各被疵訖

戒重全城堡砦要圖



而して從來研究の鵝赤尾外鎌の三山地城は決して重要設備もせなんだ事は、戒重城の落城と共に忽ちにして又抵抗を失ふて居る事を、蠹簡集感編が證明してゐるではないか!!

さすれば三山城砦は單に元弘三年中院定平公の六波羅方二階道灌に對しての作戰の遺跡を利用した丈と考へた方が至當だらう。而して研究の重要は何としても平城五砦に致さざれば戒重城の攻防は其の特色を失ふこととなるやうに思ふ。

此五城中の中八條砦は最初から設備したものでなく細川顯氏が奈良より中街道を前進して興國二年二月二十九日突如戒重の南面攻撃の據点たる安部山を占領した時に是を臨時に設備したと思はれる此事は田代文書が證明してゐる。

其他の四城砦こそ延元二年より興國二年正月迄の間に西阿公の攻勢作戰中に遂次に構築完備したと考へねば四ヶ月の抵抗は困難だらう。從來の研究は竹城、戒重、戒地井、中八條を全く同一城砦として取扱つて居る。

期しては此防は四ヶ月も要せまいだらう。

第五戒重城の攻防

此の研究も資料も全く賊軍の軍忠状たる古文書と放經丈で官軍側の文獻は只一枚もない。今日研究は困難である。だが記く事となると又相當根據のある推測が下し得るの下判明の程度に止める。

賊軍細川顯氏は前年以來大和の官軍根據地を覆滅せんとして京都を發し八幡に駐軍し次いで奈良に入り諸準備を整ふ。

附言何故八幡、奈良に駐留せしか。

細川の領地たる四國より増援兵の到着を待ちたりと判断するを至當とせん、即ち吉野朝廷の勢力よりして大阪附近及其以内には船を止むる能はずしてむしろ淀川を溯航して橋本に上陸せしめたり。

奈良に入り諸情報と綜合して西阿公の勢力以外に大なる爲め更に第二次の部隊を待ちて攻撃手を實施せるものとす。

興國三年一月二十日軍を率ひ中街道を前進し戒重城を南面より攻撃せんとして安部山に陣せり(田代文書)

研究

兵力幾千と、尠くとも三千人は下るまい。殊に田代文書によつても在京入道も加へて居るの下、三千人以上と判断するのを至當とせん。殊に吉野の關係よりして背後を振護する必要もあり四ヶ月も孤立して作戰するには相當の兵力を有せざれば、奏功せざることは此の時代の戦鬪を研究すれば目明瞭である。西阿公は必らずや四城砦に各一部を残して断然攻勢に出てたることは田代文書が證明してゐる。

そして現在の字八町附近に安部山に対して砦堡を構築して攻撃の據点とせり。然も此の中へ條砦は後日の六月二十九日賊軍の夜襲を受けてゐる(田代文書)而も落城して居らないから最後まで保持し得たのだらう。三月十五日賊軍は河合城南面攻口で晝夜戦斗のあつた事を田代文書が物語つて居る。此南面攻口とは何処か？地形判断よりして榎井西端と仁王堂の寺川畔附近と判断するが至當だらう。賊軍は必死で攻撃し死傷者も生じたことは田代文書に明瞭で天野文書は河合城の東堀にも攻め寄せた事を明らかにし天野

考三郎が負傷したのであるから、賊軍は主力を以て三月初旬に附城をして攻撃を準備し、十四日河合城の總攻撃手を東南面に準備し、十五、六兩日總攻撃手を決行せしむ。西阿公は奮然之を撃つ退した。

斯くして官軍は西阿公は孤立奮闘を認め増援の準備をするやうになった。靈簡集殘編には四月十九日、二十日、二十七日、二十九日にも合戦したとあるから、賊軍は西阿公の五城砦を各個に攻撃する爲に河合城に攻撃手を集中したもので、河合戦斗は官軍の勇戦、資料を欠くが、嚴然たる存在であつた。田代文書に依れば、四月十六日、西阿公の部隊は此の方面に攻撃手に出たことを、殘し賊軍の攻撃陣地を攻めたのだらう。

斯くて河合城は潤、四月十九日に落城した。

此間細川顯氏は依然安部山を本據として、城砦の攻撃に従事したものであらう。

此間潤、四月七日、官軍には増援があり、此の増援隊が石原田に駐った事を、天野文書が明らかにして居り、賊軍は之れを攻撃したことも明らかな

であるが、官軍の増援隊の兵力、出先は不明である。

恐らく賊軍の背後連絡線の関係上、今河合城を攻撃の爲其の兵力を集中し、此の増援は賊軍に極めて痛手にちがひない。

鶴岡社務記録には河合城の一部を賊軍が取ったことを鎌倉の尊氏に報告したのを西阿城没落と見たものだらう。

斯くて河合城は賊軍の手に落ちたので、開地井城に攻撃の鋒を向けた。そして河合城の時も賊軍は攻撃陣地を塙を塗って作ったが、開地井城にも五月二日、賊が攻撃陣地を構築中に官軍が出撃して、負傷者を出したことを田代文書が説明してゐる。

五月初旬は開地井城の東面、大であったが多勢なる賊軍は遂に五月二十日には開地井城の南面近に攻められたことは、軍忠状(田代文書)に明ら下斯くて賊軍は中八條砦と開地井城を中断して、主力を開地井城に注いだ。六月初中旬も依然攻撃を續行したのだらうが、文献がない。

斯くて六月二十六日、賊軍は一興各城此砦を夜襲した。之れには八條堡も開地

井も竹城も南面より、賊軍の夜襲をうけ、官軍は之れを撃退した。
開地井も竹城も六月二十九日又も夜襲を受けた。此の時は官軍は矢倉も焼かれて
苦戦したことは田代文書、天野文書が明示してある。而も竹城は南面の堀を
渡って城内に攻め入った。

開地井城は高矢倉の南側堀内に賊軍が進入して斯くても西阿公は防戦克
く賊軍に対したが死傷者も生じ賊の兵力は大であるし遂に寡兵如何とも
為し能はずして七月二日夜の賊の大舉の総攻撃に依って西阿公は残兵を率
ゐて外鎌城に據ったが敵は急迫し三日名取の戦死を遂ぐるに至ったもの
であらう。(天野文書、田代文書)

朝倉村顯彰會は、毎年七月三日外鎌山に於て

西阿公の慰霊祭を執行せり。